

<書 評>

小樽高商史研究会 編『小樽高商の人々』¹⁾

(小樽商科大学, 2002年, x+275頁)

阿 部 安 成

「校舎は薄い緑色に塗った木造の二階建てで、遠く海に面していた。建物の裏手に三つの棟が山の方に伸びていた」と「海に見える町」の一劃を描写した伊藤整（『若い詩人の肖像』1956年刊行）は、小樽高等商業学校（以下、小樽高商、とする）に在籍していた。整もかよったそのキャンパスにはいま、小樽商科大学（以下、小樽商大、とする）がある。きつい坂をのぼらなくては通学できないところは、小樽高商も小樽商大もおなじだった。

2001年に小樽商大は、市立小樽文学館を会場として、「小樽高商小樽商大90周年展」を開催した。小樽商大の母体となった小樽高商が開学した1911年から数えて90年めのときに、「大学の創立90周年記念事業の一環として」その展示をおこなったという（小樽商科大学長山田家正「小樽商科大学創立90周年展の開催にあたって」小樽商科大学・市立小樽文学館編『小樽高商小樽商大90周年展』2001年）。冒頭の引用は、その展示図録の裏表紙にも記されていた一文である。

創立90周年の記念事業として、展示のほかにも記念誌の刊行が予定され、それが『小樽高商の人々』としてまとめられた。小樽商大教員の今西一、荻野富士夫、倉田稔の3名が執筆した本書の目次から、編題と章題を以下に記そう。

はじめに／第一編 小樽高商の校長群像／一 実業教育の理念と実践—初代渡辺龍聖、二 高商「ルネサンス」の時代—第二代伴房次郎、三 戦時下の高商教育—第三代苦米地英俊／第二編 「高商アカデミズム」の人々／一 ヨーロッパとの出会い—大西猪之介と『囚はれたる経済学』、二 自由主義経済学者の苦悩—手塚寿郎の数理経済学、三

1) この小稿は2003・2004年度年度陵水学術後援会学術調査・研究助成により、小樽商科大学、山口大学、大分大学、京都大学、長崎大学を調査した成果の1つとして発表する。

〈人口学〉の創造—南亮三郎の人口研究、四 緑丘の外国人教師／第三編 小樽高商に学ぶ／一 草創期の学生たち—「緑丘スピリット」の醸成、二 文学への旅立ち—多喜二と整、三 大正デモクラシー下の学生たち—軍教事件前後、四 戦時下と戦後の学生たち—繰上げ卒業・学徒出陣・民主化／おわりに

この小文は、『小樽高商の人々』の書評であるとともに、わたしたちが在職する本学部の母体となった彦根高等商業学校（以下、彦根高商、とする）をふくむ、旧制の高等商業学校史をめぐる1つのレファランスとなる。

小樽商大の史誌としてはすでに、『緑丘五十年史』（小樽商科大学、1961年）、『小樽商科大学史』（財界評論新社、1976年）がある。先行する史誌があるなかで本書は、書名にもあるように、「小樽高商の人々」の校務と生活、学問と勉学に校史を代表させている。その「人々」とは、小樽高商の3人の校長（渡辺龍聖、伴房次郎、苔米地英俊）であり、「高商アカデミズム」を体現した教官（大西猪之介、手塚寿郎、南亮三郎、「外国人教師」）であり、小林多喜二に伊藤整、そして生徒（学生）たちである。

2001年から90年の時世をさかのぼる1911年に、小樽高商は開校した。東京、神戸、山口、長崎につぐ、第五高等商業学校が小樽に設けられたのである。小樽高商は名実ともに初代校長の渡辺龍聖（1862年生）が創ったという。渡辺の教育方針は、「実務教育中心主義」であり、「時代の要請に応える実業人の倫理を作ること」だった。彼は、小樽高商独特の学科として、「商業実践」「企業実践」「商品実験」をあげた。

実務教育をおこなうと同時に「実業人の人格養成とに力を入れられた」と評される渡辺はまた、「商は国家の存立上最も肝要なる職業である」、その商を担うものは、「有無不関時代の商人の所謂町人根性というような品格では、今日の社会の存立をすら危くする恐れがある。……今日の商人は、智識技能は勿論、その品格の上でも、国民の上位を占むべき資格を備えねばならない。要するに紳士中の紳士、智識徳望共に紳士中の紳士でなければならない」と述べた。²⁾

2) 当時のこうした新実業人の「資格」＝「人格」は、彦根高等商業学校をめぐってならば「士魂商才」とよばれたことだろう。

また渡辺は、「商業英語」を重視し、かつ豊富な「外国人教師」による語学教育をおこない、小樽高商を「北の外国語学校」とよばしめたという。

小樽高商の教官をみれば、『囚はれたる経済学』（東京宝文館、1920年）を主著とし、『大西猪之介経済学全集』全11巻（東京宝文館、1927年）に業績がまとめられた大西猪之介（1888年生）、『ゴッセン研究』（同文館、1920年）、『国際貿易政策思想史研究』（森山書店、1931年）の著書をもち、ワルラスの『純粋経済学要論』上（岩波書店、1933年）を翻訳し、「近代経済学の基礎を小樽高商に持ち込んだ」と評価される手塚寿郎（1896年生。1920年～1926年のフランス留学時に集めた書籍を主とする手塚文庫が小樽商科大学附属図書館にある）、「ほとんど眠らないのだという伝説」が生まれるほどに研究成果を上梓しつづけ、「南といえば……人口論」というほどの学を成した南亮三郎（1896年生。南の蔵書も小樽商大に寄贈されている）が、小樽高商にいた。

「小樽の場合は、おそらく「緑丘」における結合の意思の強さが内部からの昇格を実現させたのだろう」と学校としての一体性の証とされる第2代、第3代校長人事にしても、前述のように学の基礎や標準を創りだした教官にしても、本書は小樽高商の個性ある伝統を記している。小林多喜二と伊藤聖を輩出した歴史も、小樽高商の個性をより際立たせ、その伝統を他校と峻別させる材料となるだろう。

他方で、旧制高等商業学校（以下、旧高商、とする）についていくらかの知識があるものならばだれもがわかるように、複数の旧高商に共通する様相も本書には記されている。アジアとのかかわりでいうと、1つに、ウラジオストック、清津、釜山などへの修学旅行（1913年～³⁾、2つに、就職による「満洲」、中国、台湾、朝鮮への赴任、3つに、東亜科あるいは大陸科の設置（1938年～⁴⁾、そ

3) 彦根高商でのアジアへの修学旅行の内容を伝える資料として、『大正十五年 南支南洋修学旅行』などの文書綴がある（滋賀大学経済学部創立80周年記念展実行委員会編『80年の歩み－彦根高等商業学校から滋賀大学経済学部』滋賀大学経済学部創立80周年記念展実行委員会、2003年、参照）。

4) 彦根高商では1939年に支那科が設置され、1941年にはそれが東亜科と改称された。

して4つに、アジアについての図書、文献、報告書などの資料収集⁵⁾、である⁶⁾。

つぎに時代の要請としてあげられる共通事項に、第1に報国団の結成(1940年11月)⁷⁾、第2に経済専門学校または工業専門学校への転換⁸⁾、がある。

このように本書は、小樽高商の個性と旧高商の共通項とを記し、また旧高商から新制大学へとおおきくキャンパスがかわることをとおして、そこでの学がどのように継承されたり断絶したりしたのかについても論じている。それはたとえば、「だが、時代の制約には逆らえず、高位の教育官僚であったから、彼の思想は全体としては現代には残らない」(渡辺龍聖について)、「すべてが現在なお生命を保持しているとはいえないにしても、そこにふくまれている問題は、たんなる古典派貿易理論の批判という次元をこえて、現代経済学の根本問題へとつながっているものなのである」(手塚寿郎について。『緑丘五十年史』を引用)、「六〇年後の今日も、南の研究は生きているのである」(南亮三郎について)というぐあいである。

本書は、旧高商という集合のなかで小樽高商とそれ以外をくらべ、国立学校設置法(法律第150号、1949年5月31日)を軸として小樽高商と小樽商大(それぞれを場とした学)を照らしあわせる、といった記述の型をもっている。これは、歴史の記述における比較史の定型にはかならない(という断定が過去の

5) 旧高商というとこれまでこの点がもっとも注目されてきたといつてよいだろう。旧高商を母体とする国立大学法人の経済学部いくつかはそれぞれに所蔵資料目録を刊行している。小樽高商については、小樽商科大学経済研究所資料部編『樺太・千島関係資料目録』小樽商科大学経済研究所特殊文献目録5(小樽商科大学経済研究所資料部、1986年)がある。それらの資料を収集、整理、保管してきた小樽高商と小樽商大の機関は北海道経済研究所→北方経済研究所(1944年)→北海道経済研究所(1948年)→経済研究所(1949年)→ビジネス創造センター(1999年。一部資料は附属図書館に移管)と変遷している。

6) いくつかの旧高商の校章にはH、ふくろう、へび、といった共通する意匠がある。

7) 彦根高商での報国団結団式は1940年12月10日で、団報として『黎明』(第1号、1941年2月～第15号、1943年7月)が発行された。こうした旧高商の報国団資料としては管見のかぎりでは、大分高商については『上野ヶ丘』(第1号、1941年2月28日～第7号、1944年3月30日)があり、福島高商については『信陵時報』(第1号、1941年3月～第2号、1941年12月)、長崎高商については『扶揺』(第1号、1941年2月26日～第6号、1944年3月10日)がある。

8) 彦根高商は1944年に彦根工業専門学校の設置にともない、彦根経済専門学校となった。

ものとなっていることを望むものの、たとえば、単純化していえば、日本とヨーロッパ、近世と近代、というような比較の定型はいまもよくみられる）。

すでに、旧高商を母体とする複数の国立大学法人の経済学部などに、旧高商にまでさかのぼって記述を始める大学や学部の史誌があるなかで、この『小樽高商の人々』が上梓されたことにより、旧高商の明快な比較が可能となったことは確かである。

たとえば、彦根高商についての史誌である『陵水三十五年』と『陵水六十年史』は、小樽高商でのカリキュラムや教官の個性をも顕彰した本書とくらべると、この2著はずいぶんと単調な通史にみえてしまう（ただし後者の追想や回想を多用する記述の型は通史の単調さを解消しているが）。

今後、母体としての旧高商から始まる大学史あるいは学部史が書かれるときに、その1つの範となるといってよい『小樽高商の人々』の歴史意識をここで問うてみよう。

まずは、ここでみた展示や記念誌のきっかけとなった「90周年」という時間の数え方についてである。本書の「はじめに」は、

小樽商科大学の前身である小樽高等商業学校が、一九一〇（明治四三）年に認可され、翌一一年に開校された。それゆえ、小樽商科大学は、二〇〇一年に創立九〇周年を迎えた。

（傍点は引用者）

とその冒頭を書き起こしている。滋賀大学経済学部が2003年におこなった創立80周年記念事業も、彦根高商開学のときから数えた年月がもととなっていたし、大分大学経済学会が2003年に発行した紀要の『大分大学経済論集』（第54巻第4・5・6合併号）が組んだ「創立80周年記念号」も、大分高商の始まりから数えてのことだった。こうした創立記念のありようをみるならば、旧高商を母体とする学部では、とりたてて特別ではない大学史あるいは学部史のたどり方といえる。

国立学校設置法により、たとえば、小樽経済専門学校は小樽商大に、彦根経済専

9) 同誌「序」（2003年1月10日付、大分大学経済学部長宇野稔）は「昨年5月25日、われわれは母校の創立80周年記念式典を催し、大正11年（1922年）の大分高等商業学校創立以来、戦時中の大分経済専門学校を経て、現在の大分大学経済学部に至るまでの発展を祝賀した」と記している。

門学校は滋賀大学に、大分経済専門学校は大分大学に、包括されることとなった。またそれぞれの経済専門学校の規程が定められたときには(文部省令第18号, 1944年4月5日), 小樽高商, 彦根高商, 大分高商などの規程は廃止となっていた。

高等商業学校から経済専門学校へ, そして国立大学経済学部などへの変遷においては, すくなくとも制度上の断絶がみとめられるにもかかわらず, なぜ, わたしたちは, 「創立以来」という連続をいいたててしまうのか, それについての明快な説明はどこにもみられない。わたしには, さきに引用した『小樽高商の人々』の記述にある「それゆえ」の語が, なぜあたりまえのように記されてしまうのか, うまく納得できないのである。

こうした史誌の記述にみられる事態をひとまず, 〈フィクショナルな連続〉とよぶとすると, 『小樽高商の人々』にみえるこのような記述の仮構性は, 「伝統」あるいは「建学精神」としての「緑丘スピリット」「緑丘精神」にもあてはまる。

確かに本書は, 「緑丘スピリット, あるいは緑丘精神という言葉がいつごろから使われはじめたのか定かでない」との留保を記している。また, 「創立から一五年前後を経過するなかで, 「緑丘スピリット」なるものは緑丘人の心中に, あるイメージをもって定着していたといえる」「学内の「一致協力」ぶりはしばしば実践され……あるいは学園の沈滞ムードの打破の聲が高まったとき, 「緑丘スピリット」や「緑丘精神」の発揮や復活が叫ばれた」「校舎を「常に清良にして高尚なる空気」が包み, 草創期ゆえの「新しい気分」が教職員・学生の間に満ち, 開拓者たらんと抱負が, 建学精神としての「緑丘スピリット」を醸成していった」といった記述をみれば, まさに「創られた伝統」(ホブズボウム)としての「緑丘スピリット」を記そうとしている執筆者の意思はうかがえる。

ここで「緑丘」の語についてみると, それは1925年に創刊された月刊紙のタイトルにさかのぼれるようだ。「全国の高商系のなかでは最も早く, 東京の諸学生新聞の創刊に匹敵する」という小樽高商の学内紙である。¹⁰⁾校報かつ学生新

10) 同紙は不二出版より全3巻として復刻されている(1992年)。

聞としてキャンパスのシンボルともなったメディアのタイトルを、学校の歴史を代表させる語としてもちいるのはよいとしても、その歴史を記述するものがそこにどのような意味を籠めるのかについては、十分な注意が必要なはずである。

『小樽高商の人々』に先行する展示図録『小樽高商小樽商大90周年展』にみられる、「地獄坂を登り下りしつつ、設備的には十分でないけれども、創立当初の清新な活気に満ちた環境のなかで「緑丘スピリッツ」が育まれていった」（「I 小樽高等商業学校の創立（1906～1921）」のなかの記述）との指示とくらべれば、くりかえせば、『小樽高商の人々』では、かならずしも、創立当初からすでに建学精神が確立していたという書き方をしてはいない。とはいえ、『小樽高商の人々』のなかでくりかえしもちいられている「緑丘」の語は、ただキャンパスの場所を指すだけでなく、¹¹⁾小樽高商での生活や学や精神といった本来さまざまなであつたらうはずの小樽高商の複数の〈なにか〉を、1つの明瞭なかたちのある確かなるものへと鑄変えてしまうように、わたしには思えてならないのだ。¹²⁾「緑丘」の語は、新制小樽商大のもとでの「緑丘講座」や学生研究論文集のタイトル（『緑丘アカデミア』）として復活しているのだから、なおのことその起源や意味について記すときには用心が必要となる。¹³⁾

11) 現在、小樽商大は小樽市緑3丁目にあるが、それは小樽高商開学時の地名ではなかった。

12) さて、滋賀大学経済学部は「経済学部理念」を定め（2000年4月20日経済学部教授会）、その「1. 建学の精神と滋賀大学経済学部の誇りうる独自性」のなかで「本学部の前身、彦根高等商業学校は、建学の精神として「士魂商才」を誦い」と掲げている。「経済学部理念について（解説）」では、「この言葉は、大正末期の彦根高商の開校時には、関係教員によって独特の意味が付与される。中村健一郎初代校長は、「如才ない商人の育成ではなく、井伊大老のような上品優雅で視野の広い教養人」の育成という意味をそれに与え、好んで使用したとされる（『産経新聞』99年8月26日付、『陵水六十年史』）」と記している（「<資料>経済学部理念とその解説」『彦根論叢』第326号、2000年8月）。前掲の展示図録『80年の歩み』では「この近江商人にゆかりがあるとされる「士魂商才」については、……」（「2. 彦根高商生への陶冶」のなかの記述）と建学の精神と「士魂商才」を結びつけず、ついで2004年4月から附属図書館棟1階ではじまった展示では「彦根高等商業学校は、建学の精神として「士魂商才」を掲げ」と明記される。わたしはいまのところ、彦根高商開学当時に「建学の精神」として「士魂商才」が定められたことを示す資料をみていない。

13) 小樽商大に残る小樽高商の雰囲気についてはその一端を、阿部謹也『北の街にて』（講談社、1995年）からうかがうことができる。

あらためて述べると、『小樽高商の人々』の上梓が、旧高商の比較史の端緒をひらいたことはまちがいない。本書は、小樽高商を知ろうとするものの手引きにとどまらず、旧高商について調べるときの格好のレファランスとなる。これまで旧高商というと、そこで収集された資料が研究の材料として関心をあつめてきた¹⁴⁾。そうしたなか、本書の刊行とそれに先立つ「小樽高商小樽商大90周年展」（2001年10月12日～11月25日）と前掲したその図録、そして小樽商科大学百年史編纂室（2002年8月15日オープンセレモニー¹⁵⁾）が作成した「小樽商科大学史料展示室目録」（2002年10月1日）により、小樽高商の刊行物や文



小樽高商キャンパスのジオラマ（小樽商科大学史料展示室，2003年撮影）

14) たとえば『読売新聞』の「うんちく玉手箱」欄は2001年6月23日，7月3日，7月10日の3回にわたって「山口高商」を取りあげ，その第3回で「中国の資料膨大・豪華」の見出しのもと，「山口大学経済学部・東亜経済研究所（山口市）の書庫には「多くの研究者が一生食べていくのに困らない」（平野充好・学部長）ほど，戦前の多種多様な書籍，資料類が収蔵されている」という談話を紹介している。ここにいうのは，山口高商の刊行物ではなく収集資料である（この新聞記事は当時，山口大学東亜経済研究所におられた大庭平四郎と本学部経済経営研究所の江竜美子より教示をえた）。2001年より開催されている「旧植民地関係資料をめぐる戦前期文献保存のワークショップ」でもそこでの論議のおもな対象は旧高商などの収集資料だった。

15) 同室はWEB上（<http://www.otaru-uc.ac.jp/archives>）でいくつかの情報を発信している。前述の展示には2000名以上の来館者があったという。なお，同室の平井孝典の教示によると，『小樽高商の人々』は学生教職員をふくむ学内外関係者に3200部が配布されたうえで，初刷800部，第2刷500部が出版された。

書の所在もあきらかとなり、それらをとおした比較史も可能となっている。¹⁶⁾ さいわいなことに、戦前の高等教育機関の基礎資料となる「学校一覧」のコレクションを、わたしたちの学部の経済経営研究所は所蔵している（検索データベースについては、<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/index.htm>を参照）。旧高商それぞれのカリキュラムや、在職教官の専攻分野や、生徒の出身地と就職先については、この「学校一覧」により比較対照できる。

『小樽高商の人々』という史誌と「小樽商科大学史料展示室目録」をえたいま、わたしたちはどのような旧高商史を展望できるのだろうか。

旧高商のキャンパスで、研究と教育、修学と学習がどのように展開したのか、そうした学知と収集した文献資料¹⁷⁾にあらわれるアジア（北方やオセアニアもふくむ）とはなんだったのか、そして旧高商の所在地はどのような場所だったのか、といった3つの結節として、1つの旧高商史の叙述が可能であるように思う。

彦根高商にかかわっては、ようやく刊行物の目録稿が作成されたし、2003年度の京都大学での調査により、彦根高商と滋賀大学経済学部の教官だった石田興平教授の所蔵資料が「石田記念文庫」として本学部へ寄贈されるきっかけをえた。この文庫は、本学部としても経済経営研究所としても、初めての在職教官の文庫となった。教育にかかわる研究の究明が期待される。

旧植民地関係資料については、さまざまな活用法の模索が始まっている。¹⁸⁾

その所在地にかかわり、彦根高商の調査課（あるいは研究部）でも資料収集の対象となっていた「近江商人」の調査や研究が、彦根のこのキャンパスでど

16) 滋賀大学経済学部では前掲図録の刊行とともに、「滋賀大学経済学部創立80周年記念展」を2003年10月20日～11月14日に開催した。また、彦根高商の刊行物や文書については、本誌掲載の「＜資料紹介＞滋賀大学経済経営研究所調査資料室報⑧」の目録稿を参照。

17) 1980年代初頭から本学部経済経営研究所では「旧植民地関係資料」という分類項目をもうけて資料を整理してきた。

18) デジタル画像集としての「旧植民地関係資料画像データベース－朝鮮編」（CD-ROM版、滋賀大学経済経営研究所、2002年。（<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/index.htm>でもみられる）と、その資料解説としての阿部安成「植民地朝鮮をデッサンする－彦根高等商業学校収集資料の読み方」（working paper no.79, 滋賀大学経済学部、2003年）とその改訂版である同「植民地観光のなかのナショナルイデオロギー－20世紀初頭の朝鮮というフィールド」（『アジア民衆史研究』第9集、2004年）も参照。

のような位置にあったのかは、これからの課題である。たとえば、アジア（とくに「満洲」）の調査や研究の基礎をきずいた彦根高商教官の田中秀作は、彦根高商の研究紀要である『パンフレット』創刊号（1926年）に、「近江商人の起源に就ての一考察」をよせていた。

彦根高商開学時に、その設置場所をめぐる展開した大津と彦根の綱引きや、開学後に彦根高商が地域と、どのようななかかわりをもってきたのかについての考察も、これからの課題となる。¹⁹⁾

こうした1つずつの旧高商史を、複数の旧高商史とどのようにくらべて照らしあわせてゆくのかは、もっとも肝要な方法上の論点となる。この小稿で示した共通項の列举は、その始まりにすぎない。旧高商をフィールドとした教育とアジアと地域のつなぎ方、そして複数の旧高商の照らしあわせ方の展望がひらけたときに、旧高商は歴史を讀解して叙述するときの、1つの方法上の拠点となるだろう。

19) 同窓会である陵水会が発行した『陵水』（第9号、1937年2月）に掲載された「彦根高商創立当時を語る」座談会で、彦根高商設置をめぐる「政治」の展開を知ることができる。また、この座談会記録の元原稿（表紙に「昭和十二年一月／創立座談会原稿／陵水会」と記された綴）が陵水会館に保管されていた。